

国内経済情勢

概観

需要は、輸出の頭打ちもあって、全体として依然停滞の域を脱するに至っていない。ただ、こうしたなかで、出遅れていた官公需などには、ようやく増加のきざしがかがわれはじめた。他方、生産は引き続き抑制基調を維持しており、このため、商況の面でも、生産調整が円滑に運ばない鉄鋼などは依然軟弱ながら、多くの商品は回復歩調を続けている。金融機関は、引き続き貸出に積極的意欲を示しているものの、資金需要に格別の動意はうかがわれない。

国際収支は、経常収支の黒字がかなり減少したにもかかわらず、為替銀行の輸出手形買持ちが減少したことを主因に、資本収支が久方ぶりに大きく受超に転じ、総合では大幅な黒字となった。

生産は引き続き抑制基調、需要停滞のうちにも官公需などに増加のきざし

鉱工業生産(季節調整済み)は、10月までの動きをならしてみるとほぼ横ばいに推移しており、その後も鉄鋼、繊維、自動車など主要業界の生産動向から推して、抑制基調を続けているものとみられる。11月調査の本行主要企業短期経済観測をみても、10～12月期の生産は前期並みと見込まれている。

他方、出遅れていた官公需にようやく増加のきざしがかがわれ、また久しく買い控えられていた耐久消費財や輸送機械(トラック、軽四輪車)

などにも、更新需要を中心とした多少の荷動きがみられるが、このところ輸出の頭打ちなどもあり、需要は総じて停滞の域を脱するに至っていない。

このような情勢を映じ、メーカー製品在庫は、なおかなりの高水準を続けている。

設備投資については、上記短期経済観測その他の調査からみても、当面低調を続けるものとみられる。先行指標である機械受注(海運を除く民需、季節調整済み)は、7～9月期に前期比横ばいとなった後、10月には大幅に増加したが、これは、主として電力業の繰上げ発注などによるもので、製造業からの受注はこのところ下げ止まる気配にあるものの、なお低水準に推移している。

商品市況は鉄鋼、綿糸などを除き、引き続き回復歩調

11月から12月にかけての商品市況をみると、石油、紙、セメントなど多くの商品に、引き続き回復歩調がかがわれるなかで、鉄鋼、綿糸などは不ぞえに推移しており、9月末来の基調に大きな変化はうかがわれない。

鉄鋼、綿糸などを除く多くの商品が立ち直りを示しつつあるのは、基本的には、生産調整など供給抑制が図られているためであるが、このほか、出遅れていた官公需の増加(セメント)や季節需要の台頭(灯油、紙など)といった需要面の増加にさえられている面もないとはいえない。

これに反し、鉄鋼、綿糸などでは、内需の不振が続いているうえ、鉄鋼については輸出成約が急減を示し、また11月来の粗鋼減産をめぐる足並み

の不一致がまだ解消するに至っていないことが、市況軟化の背景となっている。

11月の本行卸売物価は、鉄鋼の続落にもかかわらず、海外高を映じた非鉄の急騰を始め、その他商品の堅調にささえられ、前月比 + 0.3 % の続騰を示し、12月上旬も前旬比 + 0.2 % の上昇となった。

11月の消費者物価(東京)は、野菜、魚介など生鮮食品の反落を中心に、前月比 - 2.0%低下した。

金融は緩和基調を維持

11月の銀行券は前年を上回る増発を示したが、財政資金がかなりの散超となったため、金融市場は引き続き平穩基調を維持した。この間、本行は約2,200億円に上る債券ならびに手形の売却を行ったが、月末に至り、現金需要などから本行貸出はかなりの増加となった(月中210億円増)。なお、財政資金の散超額は、供米代金支払の前月集中などもあって、前年同月を下回ったが、公共事業関係費の支払は久方ぶりに前年同月を上回った。

11月の全国銀行貸出増加額は、約2,000億円と前年実勢(共同証券向けを除く)並みの水準にとどまった。これは、銀行の積極的な融資態度にもかかわらず、企業の手元も総じて潤沢で、資金需要が依然鎮静を続けているためであるが、このほか、前月末が休日であった関係で、当月中の増加が実勢より低目にあらわれたという事情にもよる。恒例の決算関係資金貸出は、企業の法人税即納率の上昇に加え、銀行の積極的な態度もあって、前年を上回ったようであるが、その他の既往貸出にはかなりの返済がみられた。

なお、既発行債券利回りは、10月に下げ止まった後、ゆるやかながら上昇を続けた。これは、前月同様、新規債の発行増加に加え、銀行筋の手持債券売却が続いているためである。

国際収支は、輸出の減少などにもかかわらず、資本収支の受超もあって、黒字幅拡大

11月の外国為替収支は、総合で88百万ドルの大幅な受超となった。これは、輸出の減少、輸入の増加から、経常収支は73百万ドルの受超にとどまったものの、資本収支が徐々に黒字となったためである。貿易収支を季節調整後の実勢でみると、黒字幅は59百万ドルとこれまでに比べかなりの減少を示した(7~9月平均140百万ドル、10月112百万ドル)。資本収支は黒字に転じたが、これには、輸出減退に伴う為替銀行の輸出手形買持ち減が大きく響いており、長短借入金などの返済超過傾向は依然改まっていない。

11月の輸出は、前年同月に比べ、為替、通関とも+13%(為替では7~9月平均+27%、10月+24%)の増加にとどまった。季節調整後の実勢をならしてみても、ここ一両月為替、通関とも減少ざみとなっている。為替ベースにより商品別の動向をみると、化学製品、化学繊維は依然好調ながら、綿製品は低調を続け、鉄鋼もこのところ不振となっている。また、輸出信用状は引き続き頭打ちの状態にある。

11月の輸入は、前年同月比、為替で+6%、通関で+5%とやや水準をたかめ、季節調整後の実勢でも、前月比かなりの増加を示した。為替ベースにより商品別の動きをみると、原毛、木材、石油、鉄鋼原材料などが増加している。当月の増加には、海員ストライキを見越した在庫積み増しなど一時的要因も響いているようであり、国内生産投資活動の動向から推して、輸入はなお落ち着きぎみに推移するものと思われる。したがって、今後貿易収支は、輸出の伸び悩みにより、ひところのような好調を期待しえまいが、当面、なおかなりの黒字を続けるものと思われる。